

甘藷問屋「川小商店創業150周年記念事業」レポート

～数々の苦難を乗り越えた歴史を踏まえ、創業200年を目指す！～

川越いも友の会 事務局長

やまだ えいじ
山田 英次

1. はじめに～2つの記念事業～

東京浅草駒形の甘藷問屋「川小商店」は、明治9年（1876）に創業して今年で150周年という大きな節目を迎えた。古くから続くイモ農家以外、サツマイモ一筋で150年もの老舗企業は全く稀である。その川小商店の名称の由来は、「川越地方のサツマイモ農家齊藤小平次が東京浅草で、自分達農家の生活維持のために創業した」ことによる。

大きな節目である今年、それを記念して二つの事業が行われた。まず、6月24日（水）に川越農業ふれあいセンターで『チャレンジするさつまいもビジネスを学ぶ』と題して、川小商店五代目齊藤浩一社長を講師にさつまいも産業振興セミナーが開かれた。さらに、7月22日（水）に東京の浅草ビューホテルにて「株式会社川小商店創業150周年記念講演会」が開かれた。以下、その具体的な内容をレポートしたい。

2. 創業150年の重みと企業価値

川小商店の歴史については、狩谷昭男著『サツマイモの近代現代史～甘藷問屋川小商店136年の軌跡～』（2012年発行）に詳しい。狩谷氏は、「川小商店の社史は、明治維新から近代国家として歩み始めた日本の近代現代史とほぼ軌を同じにしており、日本

のサツマイモ産業の近現代史そのもので、大変貴重かつ価値が高い」と述べている。私自身も、川小商店の歴代社長と約40年のお付き合いがあるが、日本のサツマイモ業界の「心の拠り所」的企業であると感じている。浅草の土地柄か、下町的な温かみがある家業的風土をもった企業である。

3. 川小商店150年の歩み（概要）

川小商店の150年の歩みの概要は、次のとおりである。（注：狩谷昭男氏の講演レジュメより）

◆一代目：齊藤小平次 1876（明治9）年～1928（昭和3）年・・・小平次は、川越藩の領内であった現在の朝霞市の地主で、サツマイモ農家の出身。明治9年、20歳の時に東京の浅草駒形で「川小商店」を創業。焼き芋の小売業を主に、卸売業も兼業。大正12年9月の関東大震災で、卸売、小売部の建物を焼失し壊滅的な被害を受ける。だが、翌大正13年に卸売、小売部門ともに再建。昭和2年には、甘藷売り捌き所（支店）が8カ所となる。

〈農家との共生の経営理念〉サツマイモ産地を疲弊させず、農家の経営持続可能な価格で買い取る。この理念が二代目直衛の時代に、サツマイモ農家の「再生産価格の維持」という社是となる。

◆二代目：齊藤直衛 1928（昭和3）年～1973（昭和48）年・・・直衛26歳で二代目を継承。卸売専門となる。昭和10年に支店12カ所になる。しかし、昭和16年～昭和25年の間は、戦争による諸類配給統制のため、甘藷の自由販売が禁止となり、休業状態となる。直衛は日本甘藷馬鈴薯株式会社の検査員に徴用される。昭和20年3月の東京大空襲で、本店・住居ともに焼失。昭和25年3月に諸類統制が撤廃され、甘藷問屋業務を再開。昭和32年に東京甘藷組合の理事長に就任し、昭和48年まで務める。

直衛は、第3次焼き芋ブーム（1951～1970年の大阪万博まで）を、石焼きいもの「引き売り屋台」を考案した三野輪万蔵とともに、東京甘藷組合理事長として焼き芋用のサツマイモ原料を安定供給した立役者。

◆三代目：齊藤興平 1973（昭和48）年～2004（平成16）年・・・量販店による卸売問屋を通さない「中抜き」の流通革命が始まり、川小商店も生き残りをかけて昭和59年に小売部門に参入。翌昭和60年に、川小商店のグループ会社として、さつまいも専門店「興伸」駒形店を出店し、以後、高級大学芋を主力商品に出店数を拡大。

◆四代目：齊藤雅子 2004（平成16）年～2012（平成24）年・・・平成23年には、「おいもやさん興伸」を都内11店、埼玉県内2店の計13店舗に拡大するなど積極的な事業展開を行う。

三代目興平と四代目雅子夫妻は、力を合わせて問屋業から加工・小売部門に進出し経営の立て直しを図ったが、それとともに昭和60年頃より川越いも友の会とサツマイモ復権運動の歩みを共にし、第4次焼き芋・

サツマイモブームの先駆け的な役割を果たした。

◆五代目：齊藤浩一 2012（平成24）年～現在・・・東南アジアより原料イモの調達事業を始めるとともに、平成30年に千葉県香取市に自社農場のカワコファームを創設。約20haの畑地にて、六代目（長男）の浩史専務を中心に自社商品にあう原料イモ（ホクホク系の「あいこまち」・「栗かぐや」・「すずほっくり」など）を生産調達し、経営基盤を固めている。現在は、川上（原料イモ生産）→川中（製品加工処理）→川下（商品直売）の一括管理する経営体制となっている。

4. 6月24日 さつまいも産業振興セミナーの開催状況について

当日は、川越サツマイモ商品振興会（代表・小泉昌弘）が主催し、川越市農政課が協力して、17名の参加のもと川越農業ふれあいセンター研修室で開催された。

まず、講演Ⅰとして狩谷昭男氏（元いも類振興会理事長）より、「苦難を乗り越えてきた川小商店150年の歩み」と題して、前記の通りの川小商店一代目～五代目の歴史と、その経営的特色を話された。提案として、縁のある芋の町川越で、観光地の蔵造り街通りに目玉施設となるような「川小商店の支店を出店」して欲しいとの要望をされた。

続く講演Ⅱとして、齊藤浩一社長より「チャレンジするさつまいもビジネスを学ぶ」と題して、社会状況の変化に伴う生き残りの経営対応と、その受け継がれた理念を話された。「（買取りは）農家への再生産価格の維持を守る」「（産地・生産者と共に

発展する) 共生の経営」「(売り手良し・買い手良し・世間良し) 三方よし」「(生産者・取引先・お客様との) 信頼の積み重ね」が理念であるという。また挑戦し続ける背景として「温暖化による気候変動」「生産者の高齢化と人手不足」「消費者ニーズの変化」の環境変化があり、それによる最大の課題は「原料の安定確保」と「産地の維持」である。そのために自社農場「カワコファーム」を創設した。原料を自社生産することで、川上から川下までの一貫した事業体制へと新たに増えてきた景色があり、今後は「お客様が求める以上の価値を提供するために変わる努力」をしていきたいという。そして、これからもサツマイモの可能性を信じながら、新しいチャレンジを続けていくと述べた。

その後、参加者より東南アジアや北海道での最近のサツマイモ生産状況についての質疑応答があり、試食会では、おいもやさん興伸の「大学芋」を食べながら情報交換などが活発に行われ、有意義なセミナーとなった。

5. 7月22日株式会社川小商店創業150周年記念講演会の開催状況について

川小商店主催による、主に従業員を対象にした創業記念の講演会で、参加者は招待客(取引先やいも類関係者等)19名と従業員46名の計65名であった。会場は、浅草ビューホテル3階の祥雲Ⅰの研修会場で、午前中、なごやかな雰囲気のもと、さつまいもアナウンサーの鳥越佳那さんの司会により進められ、主催者の齊藤浩一社長の「150年の歴史を振り返った想いと200周年に向けた事業継続と期待」の開催あいさつ

にはじまり、来賓代表としても類振興会の矢野哲男理事長が祝辞を述べた。

その後、メインの記念講演では、講演Ⅰとして狩谷昭男氏より「川小商店150年の歴史を振り返る」と題して、その歴史的歩みと経営的特色についてわかり易く説明された。続いて講演Ⅱとして、日本・大学芋愛協会会長の奥野靖子氏(札幌市在住)より「大学芋の世界と川小商店への期待」と題して、国内の大学芋店の状況と大学芋のタイプ別分類などについて、ポイントを絞って紹介された。そして川小商店には、これからも大学芋界およびサツマイモ業界の先駆者であり続けて欲しいと述べ、最後に北海道にも、ぜひ出店してほしいと熱く要望された。

お二人の講演後は、トークセッション「川小商店に望むこれからの姿は」と題して、講演者お二人と共に齊藤浩一社長にもメインコメンテーターとして登壇していただき、鳥越佳那さんも参加して、コーディネーター(山田)のもと、会場の招待者や従業員もまじえ、話題を展開した。セッションでは、川小商店との深いかかわりのある交流のほか、横浜や川越にも出店してほしい、大学芋の形状を小さくして観光客が食べ歩きし易いようにしてほしい、彩りをつけてファッショナブルにしてほしい、接客ではおせっかい精神を大切に、また2月のバレンタインデーには、ハート型の大学芋を特別に販売したらどうか、など斬新なアイデアも提案され、楽しいセッションとなった。最後に、閉会の御礼あいさつでは、六代目の齊藤浩史専務より「200周年に向けての、新たな努力と決意」が述べられ、記念講演会は楽しいうちに終了した。

その後、ホテル26階のスカイグリルbuffetレストラン武蔵にて懇親交流会がなごやかに催された。

また、今回の創業150周年記念事業を行うにあたって、歴代の写真を多用した記念冊子『川小商店150年の歩み』（20頁）が製作され、参加者へ配布された。

6. 創業200周年にむかっの期待

今回、150周年記念事業の企画に関わらせていただき、次のような感想をもった。

川小商店には、サツマイモ業界の「心の拠り所」的企業であり続けると共に、培われた企業風土を大切に守り続けてほしい。

そして、これからの将来へのさらなる発展的な期待として、

- ① 優秀な人材を集め受け入れる「組織としての受け皿」をつくってもらい、その上で人材育成を行う「仕組みづくり」を、ぜひお願いしたい。
- ② 自社の商品等を支える高品質の「ブランド品種」を探し、確保していただきたい。
- ③ 首都圏や都市部をターゲットに「新しい業態の店舗」を創設していただきたい。

今後の、川小商店の挑戦的取組みと飽くなく努力を期待したい。



さつまいも産業振興セミナーで講義する株式会社川小商店の齊藤浩一社長



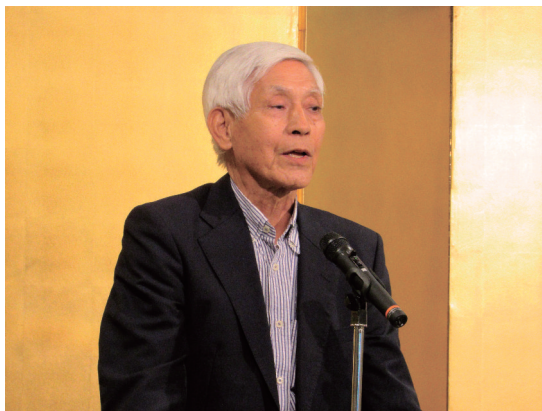
川小商店の看板商品「大学芋」。産業振興セミナーでの試食品



産業振興セミナーの参加者一同（川越農業ふれあいセンターにて）



創業150周年記念講演会の来賓代表として祝辞を述べる一般財団法人いも類振興会の矢野哲男理事長



川小商店150年の歴史を講義する狩谷昭男氏（元いも類振興会理事長）



大学芋の世界を講義する奥野靖子氏（日本・大学芋愛協会会長）



トークセッション「川小商店に望むこれからの姿」



創業200年に向かった決意を述べる六代目の齊藤浩史専務



記念冊子『川小商店150年の歩み』を発行



記念講演会に参加した株式会社川小商店従業員一同